

ポータルシステム

SharePoint Portal Server 2003

アサヒビール株式会社 様

情報共有の高度化に向けたシステム基盤を
Microsoft Office SharePoint® Portal Server 2003で構築

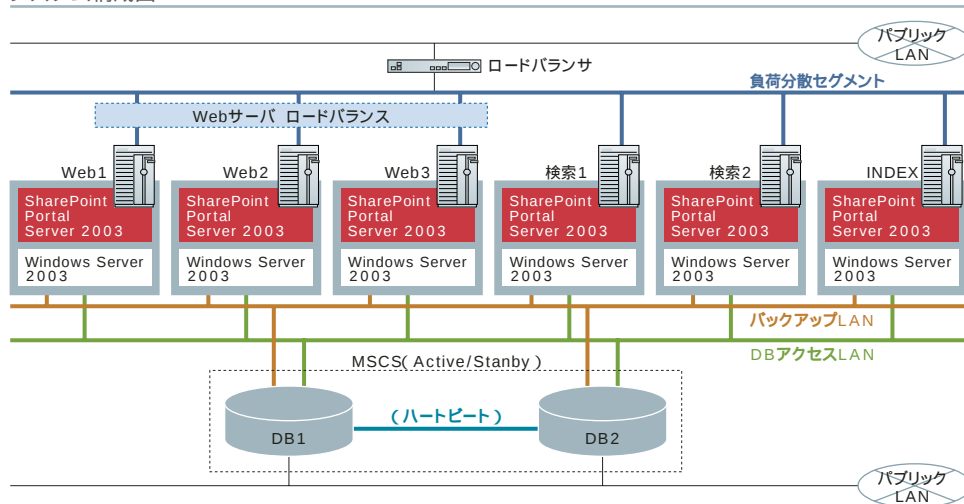
導入の背景

- 従来のポータルは情報の視認性に課題があった
- 情報共有の高度化を実現したかった

事例のポイント

- 「プル」型から「プッシュ」型へ情報配信手法を変更
- 活用されるデザイン・レイアウトの考慮、必要な情報のみの厳選表示で、使い勝手の向上を実現
- 既存IT環境(Active Directory®、Exchange®/Outlook®、SQL Server™)と親和性の高い SharePoint Portal Server 2003を採用
- .NETの開発生産性によりユーザーニーズを短期間で実現
- 日本ユニシスの「.NET」と「ポータル」の豊富な実績が決め手に

システム構成図



選定理由

- 日本ユニシスの豊富な.NET開発実績およびSharePoint Portal Server 2003の構築実績
- 既存IT環境との親和性の高いSharePoint Portal Server 2003によるマイクロソフトとの共同提案

利用ユーザーの声

- 以前に比べて情報が一度に得られ、時間がない営業担当者にとって利便性が高くなりました。
- 社内の情報、動き、流れが日々忙しい中で簡潔に見ることができ、情報共有がしやすくなりました。
- 株価、お客様の声などいろいろな情報が一目でわかることと、その情報が常に更新されてリアルタイムに入手できるので、以前の固定化されたページよりはるかに良いと感じます。
- 社内外のトピックスの内容、新製品スケジュール(発表・発売カレンダー)が便利で気に入っています。トップの声が更新されているのも、わかりやすく、以前より楽しみにしてチェックするようになりました。お客様相談室のトピックスも勉強になります。
- 全社の状況がマクロでざっくりよくわかるようになりました。とくに営業担当者以外の人にも売上状況などがわかるのはいいことだと思います。
- 当社の情報を含めいろいろな情報が一画面で見られるのでとてもいいと思います。もっと早くからあったらよかったと思います。

システムの概要

システム名称:Asahiポータル

システム概要:全社員向けポータルシステム。各種システムに蓄積されている情報の中で、社員にとって重要度が高いものを厳選し、1つの画面内に表示。Microsoft Office SharePoint® Portal Server 2003(以降、SharePoint Portal Server 2003と記述)をベースに構築。

開発期間:約3カ月

システムユーザー数:全社員
(3,607人、2005年12月31日現在)

“経営視点に立った営業活動の実践に役立っています”

奥山 博 氏
アサヒビール理事 業務システム部長

“情報の選定と情報の見せ方に工夫を凝らしました”

松田 有美子 氏
アサヒビール業務システム部 主任

“日本ユニシスからの開発時の助言にも期待しました”

山本雄之 氏
アサヒビジネスソリューションズ
ソリューション本部 システム技術部 第一チーム

アサヒビール株式会社 様

導入の背景

あらゆる情報が蓄積されているものの、検索性がネック

総合酒類メーカーとして確固とした地位を築いているアサヒビール様。同社では2001年に、マイクロソフトの情報管理ソフトウェアであるOutlook® 2000と、その機能を拡張するDigital Dashboardを組み合わせることで、約200ものシステムで分散管理された情報を、Outlook 2000のインタフェースを介して取得できるポータルシステムを整備し、営業スタッフ間の情報共有を推進してきた。



しかし、理事 業務システム部長の奥山博氏によると、このポータルシステムのリンク先が非常に多くなったことで情報の検索性が低下した結果、積極的に情報を収集する社員と、そうでない社員との間に“情報格差”が生まれつつあった。この問題の解決に向け、アサヒビール様は2005年11月にシステムの刷新を決定したのだ。

選定理由

既存IT環境との親和性の高さと、日本ユニシス+マイクロソフトのタッグが安心材料に

日本ユニシスとマイクロソフトは既存ポータルシステムの問題点をふまえて、マイクロソフトのポータル製品、SharePoint® Portal Server 2003(SPS)を用いて重要度の高い情報をSPS上のメイン画面に移行させる刷新案をアサヒビール様に提案。アサヒビール様は、SPSが既存BI環境と容易に連携できた点、また、既存Active Directory®環境を引き継げた点を高く評価し、両社の提案を採用した。



さらに、アサヒビジネスソリューションズ ソリューション本部システム技術部第一チームの山本雄之氏は、「日本ユニシスが.NETに精通していたことに加え、多くのポータルシステムの開発経験を基に、さまざまな助言をいただけるのではないかとこの点にも期待しました」と強調する。

ポータルの効果

始業時にはまずポータルを確認。業務に欠かせない存在に

システムの再構築作業は2005年12月に始められ、3カ月後の2006年2月には運用が開始された。この間、アサヒビール様はインタフェースの設計に注力した。業務システム部主任の松田有美子氏は、「掲載すべき情報の選定と情報の見せ方に工夫を凝らしました」と当時を振り返る。



現在、アサヒビール様では始業時には社員が最初にアクセスするほど、ポータルが業務に欠かせない存在となっている。奥山氏は、「ポータルによって情報共有がさらに高度化され、経営視点に立った営業活動の実践に役立っています」と頷をゆるませる。

また、「Asahiポータル」は現在、全社的に利用され、コーポレート・ガバナンスなどの強化にも役立てられている。

今後の展望

他業界でのノウハウをシステムに反映させ、新たな“気づき”を促す

アサヒビール様は今後、社内の意見を参考しつつ、情報の重要性をふまえて社内の分析系のシステムとのさらなる連携強化を図るなど、「Asahiポータル」の機能をさらに向上させていく計画だ。



「ポータルシステムとして盛り込むべき情報を抑えることは不可欠です。その点に配慮するとともに、日本ユニシスと協力し他業界でのノウハウをポータルに反映させることで、新たな風を社内に送り込むことは可能はずです。それがひいては社員の新たな“気づき”を促し、企業価値のさらなる向上につながると考えています(松田氏)」

日本ユニシス株式会社

本社 東京都江東区豊洲1-1-1
電話 03-5546-4111(大代表)
URL <http://www.unisys.co.jp/>
E-mail dotnet-box@unisys.co.jp

事例インタビューの全文はこちら

URL <http://www.unisys.co.jp/dotnet/casestudy.html>